

## 卒業生調査からみた短期大学教育

吉本, 圭一  
九州大学

安部, 恵美子  
長崎短期大学

伊藤, 友子  
熊本学園大学

稲永, 由紀  
香川大学

他

<https://hdl.handle.net/2324/10667>

---

出版情報：日本教育社会学会大会発表要旨集録. 56, pp.100-105, 2004-09-11. 日本教育社会学会  
バージョン：  
権利関係：日本教育社会学会

## 卒業生調査からみた短期大学教育

吉本圭一（九州大学） ○安部恵美子（長崎短期大学） ○伊藤友子（熊本学園大学）  
○稲永由紀（香川大学） 松永一臣（長崎短期大学）

### 1. 研究の枠組みと方法

日本の高等教育機関においては、「少子化」「ユニバーサル化」をキーワードに、様々な教育改革が展開している。特に短期大学においては、従来の地元にある小規模女子短大というイメージから、一方で自ら共学化などの革新を図り、他方で「女性の四大志向」の影響を受けており、いま新たな位置づけを模索している。短大における地域総合科学科等の「日本版コミュニティ・カレッジ」化への方策も提示されているが、そこでは、地域社会の学習要求を的確に把握し、どう対応して教育活動を展開させていくかが求められている。

本研究は、そのような課題への取組のひとつとして、卒業生の多様な実態を明らかにするために、9短期大学が共同実施した郵送による卒業生調査をもとに、卒業生からみた短期大学での教育や生活、その後の進路・職業キャリア、短期大学教育への評価等を検討するものである。

調査の実施時期は、2004(平成16)年1月～3月、対象は8短期大学の卒業後1,3,7年目の卒業生であり、有効回答1291(回収率17.5%)サンプルのデータを用いた。なお、男女別では、女性が1204、男性が78となっている。

本発表の手順としては、1)卒業生からみた短期大学教育に対するアウトカムと総合的な評価の構造、2)短期大学への入学から学生生活、卒業後の進路、3)短期大学卒業生の職業キャリア、をそれぞれ検討した後、最後にまとめとして「何が短期大学教育の有用性を決めるか」という問題提起を試みたい。なお、分析軸として、卒業生の出身学科を「人文教養」「工業」「家政」「教育」の4分野に分類した専攻分野間、卒業年次3分類のコーホート間の比較を行い、さらに先行調査として四年制大卒者に関する調査結果「日欧の大学と職業」(日

本労働研究機構2001、主査吉本圭一)との比較も試みる。

なお、調査対象短期大学のプロフィールは表1-1のとおりである。

### 2. 短期大学教育の成果(アウトカム)

卒業生が、短期大学をどう評価しているかを検討するために、ここでは「短期大学の教育がどのような側面で役に立っているか」という短大教育の有用性に関する項目と、「短大時代に獲得した知識の仕事への活用度」のアウトカム指標5項目及び、「もし今18歳で高卒後の進路選択ができるとしたら」という仮定法の問いによる総合評価をみていく。

#### 2-1. 学科別・卒業年次別の評価

まず、4項目の有用性評価は、卒業生全体では「人格の発達の上で」が平均値3.76で最も高く、「満足のいく仕事を見つける3.61」「充実した家庭生活を送る3.54」と続き、「長期的キャリアの展望3.30」が最も低かった。専攻分野別では、すべての項目で教育系卒業生の評価が最も高く、工業系卒業生の評価が最も低かった。また卒業年数の短い者ほど、評価が高く、卒業年次を経るごとに有用性は低下する傾向にあった。

大卒者対象の先行調査と同じ質問では、「長期的キャリアの展望」が「満足のいく仕事を見つける」より高いが、短大卒業生は、「長期的キャリアの展望」が「満足のいく仕事を見つける」より低く(0.31ポイント)、短大と大学とでまったく逆の傾向にある。大学に較べると短大教育は、満足のいく仕事を見つけるという短期的な効用は高く評価をされるが、長期キャリアの形成という点で不足感が大きいという特色が明らかになったのである。

また、短大在学中に獲得した知識の仕事への活用度の評価は、専門職系の就職者の多い教育系が3.80と高く、工業系(2.84)で低い。教育系では、短大で取得した資格や免許を使った職種に就く卒業生が多いことが、在学中に獲得した知識の活用度が高いと評価する理由と考えられる。

次に、卒業生たちが今ふりかえって、短大教育を選択したことをどう思っているか、その総合的な評価をみるために、「もし今18歳で高卒後の進

表1-1 調査対象短期大学のプロフィール

	設置地域	専門分野	入学定員	共学/別学
A短大	地方都市	人文・教養 教育	120	共学
B短大	地方都市	家政/教育 人文・教養	220	女子のみ
C短大	地方都市	人文・教養 工業	280	共学
D短大	地方都市	家政/教育	290	共学
E短大	地方都市	家政/教育 人文・教養	450	女子のみ
F短大	政令都市	工業	228	共学
G短大	政令都市	家政/教育	300	女子のみ
H短大	政令都市	家政/教育 人文・教養	580	女子のみ

※入学定員・共学/別学は平成14年当時のデータ

路選択ができるとしたら」という仮定法の問いを用意した。この問いに対して、卒業生全体では、再び短大を選ぶとする者が約6割であり、大学や専門学校を選択する可能性より高かった。また、同じ短大を選ぶ者は約半数、同じ専門分野を選択する者は、6割弱であった。学科間のばらつきもあり、さらに、教育系で短大に行くとする者の割合が、7割を超えて突出して高く、逆に、四年制大学を選択する可能性が7割近くあったのが工業系の卒業生であった。

また、短大を選ぶ可能性は年数を経るほどに減少し、逆に四年制大学や専門学校選択の可能性は増加している。このことは、同じ短大・同じ専門分野を再び選択する可能性、つまり短大への回帰性は、卒後間もない卒業生には強いが、年数を重ねるごとに薄れていくことを意味している。

さて、四年制大学卒業者は一定の年齢になると、高等教育で獲得した知識が効果的に発揮される(吉本2003)という。しかし、今回の調査結果を解釈してみると、同じ高等教育機関であっても、短期大学で獲得した知識は、卒業直後には一定の効果をもたらすものの、初期キャリアに関わる長期的な効用は望めないのかもしれない。このことは、短大と四年制大学間には、高等教育の質の上での相違があるという可能性を示唆している。

結局、そのため卒業生の短大に対する親和性や回帰性が継続・保持されにくいのではないだろうか。短期大学教育の完結教育機関としての限界性に関する検討課題が読みとれる。

表2-1 短期大学教育の有用性

計	学科				卒業後の年数			
	人文教養	工業	家政	教育	1年目	3年目	7年目	
(N)	(1196)	(205)	(93)	(511)	(387)	(442)	(386)	(475)
a. 満足のいく仕事を見つける上で	3.61	3.31	3.09	3.51	4.02	3.72	3.58	3.48
b. 長期的なキャリアを展望する上で	3.30	3.07	2.92	3.28	3.53	3.38	3.33	3.17
c. 充実した家庭生活を送る上で	3.54	3.31	3.00	3.62	3.70	3.57	3.51	3.50
d. 人格の発達の上で	3.76	3.83	3.45	3.66	3.91	3.85	3.70	3.63
E1. 短大で獲得した知識の活用度	3.44	3.17	2.84	3.37	3.80	3.59	3.49	3.17

表2-2 もし18歳で再度進路選択する可能性(%)

計	学科				卒業後の年数			
	人文教養	工業	家政	教育	1年目	3年目	7年目	
(N)	(1125)	(189)	(86)	(487)	(363)	(418)	(360)	(404)
A. 短大に行く	59.9	57.7	51.2	53.6	71.6	63.7	61.6	53.0
a. 同じ短大に行く	49.6	50.2	41.2	43.5	59.4	56.5	51.4	38.7
b. 同じ専門分野を選ぶ	57.0	51.9	46.4	51.4	69.8	60.6	56.1	51.1
B. 四年制大学に行く	53.6	51.1	68.2	56.9	46.2	51.4	52.7	55.8
C. 専門学校に行く	35.5	41.8	41.7	36.9	28.7	33.4	34.5	41.1
D. 進学しない	8.1	8.4	4.9	8.6	8.1	8.1	8.9	6.8

## 2-2. 短期大学教育アウトカム指標と短期大学への総合評価の関連

次に、アウトカムと総合的な評価との関連について検討した。アウトカム指標5項目で(評価値5・4)と答えた者を高評価群、また(評価値3・2・1)とする者を低評価群とし、この2群間の「短大選択比率」「同じ短大選択比率」を示した。

この結果から、短大を選択する可能性、同じ短大を選択する可能性は共に、5項目すべての短大教育アウトカム指標で、高評価群の可能性が、低評価群より15.6~30.9%ポイント高い。

特に、同じ短大を選択する可能性では、「満足のいく仕事を見つける上で」において、2群間での差が最も拡大している。このことは、短大教育が、卒業後の就職に役に立ったと思う卒業生ほど、卒業した短大の教育を高く評価する傾向があることを示している。

また、調査対象者全体の短大選択の可能性59.9%、同じ短大選択可能性49.6%である中で、「長期的なキャリア」高評価群では、短大選択は73.2%、同じ短大選択63.1%と極めて高いことが注目される。特に「長期的なキャリアの展望」は、5つのアウトカム指標の中で最も低い評価を示した項目であり、つまり有用性を評価している卒業生の数は他の項目に較べて少ないが、もしそうした肯定的評価があれば、18歳なら再び短大へ、また同じ短大へ進学と考える気持ちが強いのである。全体的には、長期的キャリア形成に対する有効性が低く、完結教育機関としての限界が見える短期大学教育であるが、一方で、短大で受けた教育が長期的キャリア形成に役に立つと評価する人の短大教育への親和性は高いことが読みとれる。

全体的には、長期的キャリア形成に対する有効性が低く、完結教育機関としての限界が見える短期大学教育であるが、一方で、短大で受けた教育が長期的キャリア形成に役に立つと評価する人の短大教育への親和性は高い。

この傾向は、短期大学カリキュラム改革の今後の方向性として、卒業直後の仕事さがしに役立つための教育内容や方法論の提供だけではなく、卒業生の長期的キャリア形成に効く教育内容や方法論の開発も同時に行う必要性を示唆しているのではないだろうか。

表2-3

	「短大」選択比率				
	高評価群(H)		低評価群(L)		H-L
	(N)	%	(N)	%	%
a. 満足のいく仕事を見つける上で	457	67.7	243	44.8	22.9
b. 長期的なキャリアを展望する上で	331	73.2	365	50.6	22.6
c. 充実した家庭生活を送る上で	384	67.5	315	51.9	15.6
d. 人格の発達の上で	468	68.8	233	46.7	22.1
短大で獲得した知識の活用度	312	68.4	210	51.5	17.0

表2-4

	「同じ短大」選択比率				
	高評価群(H)		低評価群(L)		H-L
	(N)	%	(N)	%	%
a. 満足のいく仕事を見つける上で	398	63.2	173	32.3	30.9
b. 長期的なキャリアを展望する上で	286	63.1	280	39.5	23.6
c. 充実した家庭生活を送る上で	335	59.6	234	34.3	25.3
d. 人格の発達の上で	410	60.7	162	33.0	27.7
短大で獲得した知識の活用度	222	49.4	163	40.3	9.1

## 2-3. 短大別の評価

短大教育のアウトカムを評価するとすれば、それは個々の短期大学間で提供する教育経験との関連でそれを解釈していく必要がある。そこで、調査対象となった8短大を、「もし18歳ならば再び同じ短大を選ぶ」という総合評価の平均値で、高評価1短大(E)・中評価5短大(A, B, D, G, H)・低評価2短大(C, F)の3グループに分類し、有用性評価とアウトカム指標5項目の評価を比較した。

高評価短大は5項目すべてで、平均よりも0.1ポイント以上高かった。中でも高評価と低評価の短大の間で、「短大で獲得した知識の活用度」に関して最も大きな差がみられた。高評価の短大が、地方都市型・女子のみであるのに対し、低評価の短大は、政令都市型・共学という特徴がある。この評価の差には、各短大の教育内容や設備の充実度等に加えて、学科構成・地域性・男子学生の有無等、短大の特徴自体が反映しているのかもしれない。

また、卒業までに獲得した能力の中で、短大3グループ間で有意差のある項目の平均値をみると、高評価短大は、「幅広い知識や教養」の評価が高く、続いて「創造性」「自発性・自主性」「話し言葉によるコミュニケーション能力」などの基礎教養・基本的な生活能力のみならず、教育課程から直接もたらされる「専門的知識・技能」との評価もともに高かった。

表2-5 短期大学教育の有用性

(N)	高評価短大			●[同じ短大を選ぶ]の平均値
	高評価短大	中評価短大	低評価短大	
	227	583	179	
a. 満足のいく仕事を見つける上で	3.74	3.57	3.15	高評価短大…3.67(1)
b. 長期的なキャリアを展望する上で	3.36	3.27	2.99	中評価短大…3.41~3.49(5)
c. 充実した家庭生活を送る上で	3.63	3.57	3.09	低評価短大…3.16~3.25(2)
d. 人格の発達の上で	3.87	3.77	3.40	
E1短大で獲得した知識の活用度	3.60	3.36	2.84	

## 2-4. 人生観と職業キャリア志向別の評価

短大教育のアウトカム・総合的評価を左右するのは、短期大学側の条件と同時に、個々の卒業生の人生観、職業キャリア志向が関係する。そこで、卒業生の人生観、職業キャリア志向を見るために、女性の職業と家庭に関する意識項目を取りだして、アウトカム指標・総合評価との関連を調べた。その結果、今回の調査対象となった卒業生では、「結婚や出産時に仕事を辞めるが、子どもが一定の年齢になったら再び職につく」という女性の生き方を支持する者が最も多い。そして、この「中断再就職」と、「仕事継続」さらに「結婚家事専業」の3つのタイプの志向に分類して比較してみると、中断再就職志向の卒業生で、短大選択・同

じ短大選択の比率が最も高い。つまり、短大教育は「結婚や出産時に仕事を辞めるが、子どもが一定の年齢になったら再び職につく」という考えを持つ人に最も支持されていることが明らかになった。

表2-6

(N)	仕事継続志向		家事専業志向		中断再就職志向	
	平均値	高評価%	平均値	高評価%	平均値	高評価%
	422		141		675	
a. 満足のいく仕事を見つける上で	3.55	53.8	3.53	49.6	3.64	56.1
b. 長期的なキャリアを展望する上で	3.31	41.6	3.27	40.7	3.29	37.1
c. 充実した家庭生活を送る上で	3.51	50.0	3.61	52.2	3.53	46.6
d. 人格の発達の上で	3.73	57.4	3.73	56.7	3.73	58.1
E1短大で獲得した知識の活用度	3.38	52.5	3.42	49.6	3.44	54.5
A. 短大に行く	3.60	55.3	3.68	56.7	3.86	62.4
a. 同じ短大に行く	3.37	47.5	3.41	45.1	3.53	50.5
b. 同じ専門分野を選ぶ	3.57	54.7	3.46	47.1	3.70	59.3
B. 四年制大学に行く	3.50	57.8	3.48	58.1	3.22	50.5
C. 専門学校に行く	2.76	35.5	2.87	39.2	2.77	36.2
D. 進学しない	1.51	7.9	1.64	9.9	1.54	7.0

## 3. 卒業生たちの短期大学経験 — 入学時の進学理由、卒業直後の進路との関連に着目して

前節で触れた短期大学評価のレファレンスとなっているのは、もちろん卒業生自身が過ごしてきた短大時代である。本章では、短期大学での過ごし方や短期大学アウトカムへの評価そのものへの関連が深いと考えられる「不本意進学者」の短期大学経験や卒業直後の進路との関係に着目しながら、卒業生たちが経験した短期大学教育について分析を試みたい。

### 3-1. 当該短期大学入学前の経験

卒業生たちが当該短期大学に進学する前の経験をみてもみると、格別の多様性はない。短期大学入学前に他の高等教育機関(大学など)や予備校に在籍した経験を持つ学生は若干いるものの、ほとんどの学生は18歳+1~2年に当該短期大学に入学し、約6割の学生は当該短期大学入学以前にいわば「高校」以外の経験(アルバイト経験を含む)を持たずに、当該短期大学へ入学している。

ただし、進学理由はさまざまである。本調査では進学理由について、当該短期大学への進学理由

表3-1 短期大学への進学理由 — 積極的進学と消極的進学 (%)

消極的進学(不本意進学)	22.2
当該短大進学理由	
① 経済的な理由	4.5
② 希望した学校に進学できなかった	
③ 高卒での就職がない	
他高等教育機関との比較における進学理由	
④ 経済的な理由	4.1
⑤ 希望した学校に進学できなかった	13.6
積極的進学	77.8
合計	100.0
N	1,291

注1:「当該短大進学理由」は、あてはまるもの2つに○を付けてもらい、そのうち上記の①②③どれかに1つでも○を付いていた卒業生の比率。

注2:「他高等教育機関との比較における進学理由」は、短大以外の高等教育機関への進学を「考えた」と回答し、かつその理由(1つ選択)として④⑤を選んだ卒業生の比率。

と、大学や専門学校など他の高等教育機関と比較した場合の短期大学選択理由について聞いてあるが（具体的な項目については紙幅の都合で省略）、これらの指標から「必ずしも積極的に短期大学あるいは当該短期大学へ進学していない学生」（以下、「不本意進学者」）を抽出してみると、全体の22%がそれに該当している（表3-1）。もっとも、残りの78%はそうでない者であり、全体としては8割近くの学生が短期大学および当該短期大学を積極的に選択して進学していることになるが、短期大学の中でも、前章での評価が低かった短期大学や工業系学科で「不本意進学者」が多くなっており、また、男性では46%が「不本意進学」、特に他の高等教育機関への進学を考えたが希望した学校に進学できなかった、と回答した者が多くなっている。

### 3-2. 卒業生たちが経験した短期大学

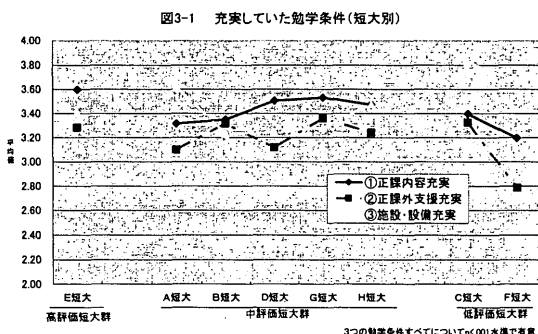
次に、卒業生が経験した短期大学について、①短期大学での勉学条件の充実度 ②卒業生本人の学生生活の2つのフェーズから描き出してみることにしたい。

#### 3-2-1. 短期大学の勉学条件

本報告の冒頭で示したように、今回調査対象となった短期大学のカリキュラムは多様である。こうしたカリキュラムの多様性は、個々の短大のカリキュラムそのものに関する客観的なデータの分析から描き出せるとともに、そうしたカリキュラムの中で実際に勉強してきた学生たちの主観のレ

表3-2 短期大学で充実していた勉学条件

- ①正課内容の充実
  - a. 勉学全般に関する指導体制
  - b. 卒業論文・卒業研究への指導・助言
  - c. 専攻の授業内容
  - d. 選択できる授業の多様性(多さ)
  - e. 学科カリキュラムの体系的性(全体的なまとまり)
  - f. 試験や成績評価の方法
  - g. 授業やコースを選択する自由
  - h. 授業における実学性(実践で役立つ授業)の重視
  - i. 授業方法の工夫
- ②正課外支援の充実
  - k. 授業以外で教員と接触する機会
  - l. 学生同士が交流する機会や場
  - j. 就職指導の組織や実習機会
  - m. 短期大学の意志決定に学生が参加できる可能性
- ③施設・設備の充実
  - n. 図書館の施設や蔵書
  - p. パソコンや各種の実験器具
  - o. 教材やテキスト



ベルからも描き出すことができる。今回の調査では、在学していた短期大学での勉学条件(16項目)が充実していたかどうかを5段階尺度で問うた。これらを使って個別短大における勉学条件の差違を描き出すために、これら16項目(表3-2)の回答傾向の分析を元に、大きく①正課活動 ②正課外での学生支援 ③施設・設備の3つに分けて回答を集約し(各項目回答を加算し項目数で割ったものを、各カテゴリーに対する評価とした)、短大別に平均点を算出して比較してみた。その結果、全体として理論的中央値(3.00)よりも高い評価がでていたものの、8校の短期大学間でこれら3つの勉学条件の充実度には明らかに差違が見られる(図3-1)。なお、前章で「低評価短大群」に含められた短期大学(C、F)は、「不本意進学者」の比率が比較的多い短期大学でもある。

#### 3-2-2. 短期大学時代の学生生活

次に、卒業生が短期大学時代にどのような生活をしてきたかを知るために、在学中の生活時間、在学中の企業実習、在学中のエクステンション講座等への参加、そして、在学中一番力を注いだ活動について見ていった。各年次とも、8割前後の学生が短期大学を所定年限の2年で修了している。生活時間は、授業への出席で1日平均約5時間であり、家政・教育系の学科で若干長くなっているものの、授業外での学習を「ほとんどしなかった」と回答した卒業生は、学期中で4割、長期休暇中になると約5割に達しており、全体として彼女/彼らが授業以外での学習活動をほとんどせずに短期大学生生活を過ごしていたことが分かる。また、人文・教養・その他など、短期大学での学習と資格とが直結していない学科では、およそ1/4の学生が正規の授業・実習以外に講座や学校に通っていた。更に、約8割が在学中にアルバイトやインターンシップ等を含めた仕事を経験していた。

こうした学生生活の中で卒業生が在学中一番力を注いだ活動を見てみると、授業内外での学業に力を入れていた卒業生(以下、「学業重視型」)が40%、サークルやアルバイトなど学業以外の活動に力を注いでいた卒業生(以下、「生活エンジョイ型」)が50%となり、若干「生活エンジョイ型」学生が多いことが分

表3-3 在学中一番力を注いだ活動(学生生活類型)

	(%)
学業重視型	39.1
授業関係の勉強	37.8
授業以外の勉強	1.3
生活エンジョイ型	49.0
サークル・クラブ	7.8
友達との交際	25.4
アルバイト	12.3
趣味	3.4
その他	2.2
特にない	8.1
無回答	1.6
合計	100.0
N	1,291

かる。卒業年数が若いほど「生活エンジョイ型」が若干増え、学科別に見ると工業系学科卒業生に若干高く（63%）、短期大学別に見ても50%から66%まで若干の開きがある。ただし、「不本意進学者」とそうでない者との間に、こうした短大生活の重点の置き方に違いはみられない。

### 3-3. 卒業直後の進路とそれを左右する要因

こうした短期大学経験を経て、卒業生たちは短期大学卒業後の最初の進路を決めていくことになる。そのとき、卒業生たちのこうした短期大学経験は卒業直後の進路へとどうつながっていったのだろうか。更に、短期大学入学前の経験、特に「不本意進学者」であることは、こうした短期大学経験や卒業直後の進路に、決定的な影響力を持っているのだろうか。

#### 3-3-1. 卒業直後の進路

卒業生たちの卒業直後の進路を見てみると、就職した者が71%であり、進学した者が13%である。アルバイト・フリーター、もしくは求職活動を続けた者も、合計すると進学者と同じくらい存在する。卒業から年数が経つ者ほど卒業後すぐ就職す

表3-4 卒業直後の進路

	(%)
卒業後すぐ就職	70.5
卒業後すぐ進学	13.0
アルバイト・フリーター	8.2
家事手伝い	1.5
求職活動を続けた	4.5
その他	1.8
無回答	0.5
合計	100.0
N	1,291

る割合は若干減る。また、男性卒業生全体の4割、「不本意進学者」全体の2割が卒業後すぐに進学しており、こうした属性によって割合は異なっている。

#### 3-3-2. 卒業直後の進路とその規定要因

こうした卒業直後の進路に対して、前節あるいは前々節で見てきたような入学前の経験や短期大学経験が、どのくらい影響を及ぼしているのだろうか。ここでは、将来の進路（進学したか否か）を被説明変数にして、性別、卒年、在籍短大での勉学充実度、学科、進学理由、そして学生生活類型を説明変数としてロジスティック回帰分析を試みた。その結果、確かに「不本意進学者」であることが卒業直後の進学へ強い規定力を持つが、それとは別に、正課内容が充実していないこと、あるいは施設・設備が充実していないことが、卒業直後の進学へと強い独自の規定力を持っていた。こうした規定力は、性別、卒年、学科にはでない（回帰分析表は省略）。

これらのことから、「不本意進学者」が満たされ

ない意欲を満たしに更に進学していくということとは別に、短期大学での教育に良くも悪くも満たされない学生が更に進学していつていることになる。この部分は更に分析を深める必要があるが、いずれにせよ、進路を一つのアウトプットと見立てたときに、短期大学での勉学条件も先の進路を左右する一つの大きな規定要因となっていることには違いない。

### 4. 短期大学卒業生の職業キャリア

ここでは、短大卒業生の現在の就業状況とキャリアの展開の状況を把握するとともに、そこでの短大教育の活用実態を検討することによって、いわゆる「ガラスの天井」問題についての検討を行いたい。すなわち、短大卒業後に就業経験を積むごとに、しだいに魅力的な職業生活やキャリアを送るようになってきているのか、それとも、短大卒業生のキャリア展開には何かしらの見えない限界がかぶせられているのだろうか。

#### 4-1. 現在の就業状況

短期大学卒業生のなかで、調査時点でフルタイムで働く正規就業者は、全体の半数強を占めている。その一方、3割近くの卒業生がアルバイトやパート等の非正規就業者である。

学科・専攻別では、正規就業者の占める比率が最も高いのは「家政」系であり、次いで「教育」系となっている。逆に非正規就業者の占める比率が高いのは「人文教養」系である。なお「教育」系は、3割弱の卒業生が非正規就業者でもある。また「工業」系では求職中の者の比率が他の専攻より高くなっている。

また、卒業後年数別にみると、正規就業者の占める比率は卒業後3年目が最も高くなっている。つまり、卒業1年目では卒業時からの無業・フリーターが多く、卒業7年目になると、新たに家事・子育てに従事している者が多くなっている。

表4-1 現在の進路・就職状況

	学科					卒業後の年数		
	人文教養	工業	家政	教育		1年目	3年目	7年目
N	1195	206	95	513	381	435	394	435
正規就業	55.1	48.5	48.4	59.3	54.6	50.3	58.6	54.7
非正規就業	27.0	35.0	20.0	24.0	28.6	31.7	29.4	22.8
進学	5.6	3.4	12.6	5.3	5.5	12.6	3.0	0.2
家事・子育て	8.6	9.2	8.4	8.2	8.9	2.1	4.6	18.2
求職中	3.2	2.9	9.5	3.1	1.8	2.8	4.1	3.4
その他	0.5	1.0	1.1	0.2	0.5	0.5	0.3	0.7
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

#### 4-2. 職業キャリアに関わる短大のアウトカムと卒業生のキャリア

さきに検討したアウトカム指標5項目の中でも、とくに長期的なキャリアへの有用性と、卒業生の就業キャリアの展開との関連をみると、表4-2の

ように、「長期的なキャリアへの有用性」の評価は、どの学科でも、またどの就業状況においても、卒業年数を経るごとに減じてきていることがわかる。

まず就業状況別にみると、正規就業者で「長期的なキャリアへの有用性」を最も多く感じており、非正規就業者で有用性評価が低い。そして、どの場合にも、卒業後の年数に沿って効用感が低下している。

学科別では、教育、家政系で評価が高いが、卒業時点では「長期的なキャリアへの有用性」の最も高かった教育分野でも、卒業1年から7年目までの間には0.26ポイントの低下が見られる。

この2つの知見と、表の左側の、どの学科でも正規就業者が増加していることとは、いささか整合しない。つまり卒業後の年数を経るごとに長期的効用を高く感じるはずの正規就業者が増加しているにもかかわらず、現実の効用感は低下しているのである。

表4-2 就業キャリアと短大の有用性

学科	就業状況	正規就業者の比率(%)			長期的なキャリアへの有用性(5段階評定平均)		
		卒1	卒3	卒7	卒1	卒3	卒7
人文・教養		42.3	54.4	47.1	3.10	3.21	2.91
工業		36.7	52.0	53.7	3.00	3.22	2.70
家政		53.7	59.5	59.2	3.36	3.24	3.26
教育		49.4	61.1	51.8	3.64	3.54	3.38
	正規就業				3.47	3.35	3.31
	非正規就業				3.20	3.32	2.75
	その他				3.43	3.31	3.26

#### 4-3. 正規就業者における職種の対応

上記の問題点を考えてみると、正規就業者の職種が、短期大学時代の学科や専攻と対応しているかどうかということが重要であることがわかる。

すなわち、「工業」系の対応職種を「情報処理技術者」としてみても、「対応」した職種に就いている者の比率は21.7%で、他の学科と比較して必ずしも多くない。そして、これを卒年別に見ると、卒業1年目は27.1%が対応職種に就いていたが、卒業7年目では、その比率は、13.6%と大幅に減少している。

次に「家政」系では、「栄養士・管理栄養士」「医療技術者」「デザイナー、コーディネーター」を対応職種として想定できるから、「正規就業者」のうち「対応職種」に就く者の比率は、33.9%である。ここでも、卒年別に見ると、「対応職種」比率は卒業1年目で45.4%もあったものが、卒業3年目では31.0%、卒業7年目では27.6%と大きく減少している。

最後に、「教育」系では対応職種は、「教員」「保育士」である。この「対応職種」比率は、卒年計で76.4%と、他の分野と比べて圧倒的に対応職種に就業していることがわかる。しかし卒業生の就業職種と学科の対応関係が強い「教育」系におい

ても、卒業後の年数による変化は大きい。卒業1年目と3年目では、それぞれ86.4%、84.1%の者が「対応」職種に就いているが、卒業7年目になると52.9%となり、まさに30%ポイント近く大幅に減少している。

つまり、短大の卒業生は、卒業後の年数が経つに伴い、職業を、「対応」職種から「非対応」職種に変えていく傾向がみられる。短大の専攻分野を活かして職業キャリアを積んでいくというのではなく、どこかに「ガラスの天井」の存在を考えざるを得ない状況なのである。

#### 5. まとめ

最後に、短期大学教育のアウトカム諸指標を規定する要因について、多変量解析を用いて考察を加えた。説明変数は第2節で取り扱った短期大学のアウトカム評価を扱った各種指標、そして被説明変数に各節で用いた指標、具体的には性別、入学時の進学理由、卒年、専門分野、在籍短期大学での勉強条件、短大時代の学生生活、卒業直後の進路、現在の状況、配偶者の有無の各変数を投入した。

その結果、主として2つの知見が見いだされた。まず、仕事・キャリア上の短期大学の有用性に関する諸指標に対して強い正の規定力が見られたのは短大時代に学業重視型生活を送っていた者、そして、現在関連職種で正規就業している者であった。この2指標は再度の進路選択という仮定法による総合評価に対しても一定の正の規定力を持っていて、短大で学業中心の生活を送っていたか、評価している時点で卒業学科関連職種に正規就業しているかが、特に短大の有用性に大きく影響していることが分かる。これに対して、予想されたことでもあるが、「不本意進学者」であることは、職場選択や短大で獲得した知識技能の活用に対して負の規定力を持つ。更に特に先の仮定法による評価に対しては、短大あるいは同じ短大に対して強い負の規定力を、4年制大学進学へは逆に強い正の規定力を持っていた。

次に、卒業後何年経っているかが独立して短期大学の有用性に負の規定力を持っていることも認められた。具体的には、「不本意進学者」ほど強くはないが、職場選択や短大で獲得した知識技能の活用に対して若干負の規定力を、更に特に先の仮定法による評価について、同じ短期大学への進学選択に対して強い負の規定力を、4年制大学進学へは若干ではあるが正の規定力を持っていた。このことから考えると、第4章で議論された、短期大学の長期的な効用に関する「ガラスの天井」の検討の重要性を示唆するものである。